

38. 一酸化炭素中毒に対する CONSB テストの検討—とくに治療後間歇型中毒へ移行した1例について—

八木博司 辛 龍雲 佐渡島省三
中村 勁 田崎美智子 河津好宏
(八木厚生会病院内科)

一酸化炭素(CO)中毒に高気圧酸素(HBO)療法が有効な事は論をまたないが、HBO療法を何時まで続けるべきかについては、なお論議がある。

私共は本会理事長の榊原らが主張した脳波の正常化を一指標に、昭和63年末までの17年間に82例のCO中毒症例を経験し、これら症例に延べ668回のHBO療法を行った。しかし、どうしても脳波の正常化が得られなかった症例を18例経験しており、これら症例の中事故退院2例、死亡2例、精神異常4例で精神科へ転医したが、他は異常脳波を示したにも拘らず active day life を楽しんでいる。従って、CO中毒前に異常脳波を示した症例に脳波の正常化を期待するのは無理と考えられた。

そこで、DR. R.A.Myers らが行っている carbon monoxide neuroscreening battery (CONSB) テストを臨床例に応用し、脳波とこのテストの相関について検討した。

その結果、正常脳波を有する正常人の CONSB テストの値は年齢の増加と共に増加し、高齢者では正常値よりはるかに高値を示す事が判った。また、CO中毒例においてはまだ症例数が少ないため相関関係を明示する事はできなかったが、CONSB テストが異常で脳波の正常化をみた例が少なくなかった。

しかるに、最近、78才女子の症例で脳波、CONSB テスト、CT が HBO 療法後ともに正常範囲内にもどったと考えられた1例で、間歇型CO中毒に移行した症例を経験し、あらためてCO中毒予後判定の難しさを痛感した。

ここにその症例を報告し、CO中毒例において何時まで HBO 療法を続けるべきかについて御教示を仰ぎたいと思う。

39. 脳外科領域に於ける老人性痴呆症に対する高気圧酸素治療の有用性

土田 隆 村本真人 野口洋三
(磯子脳神経外科病院脳神経外科)

【目的】脳外科領域において、老人に発生した様々な疾患により惹起された老人性痴呆の、患者自身を含めた周囲に於ける社会的影響は、昨今の老人飽和状態の我国では大きな問題となってきた。この老人性痴呆に対し、脳循環代謝剤等を投与し有効な成績を示すものも見られるが、未だ確たる治療方法は見出されていないのが現状である。こうした中で我々は、高気圧酸素治療による有用性を検討してみた。

【方法】対象は痴呆を有した70才以上の高齢者で、高度の心疾患を合併しない58例に於て施行した。原疾患は脳動脈硬化症、脳出血、脳梗塞、頭部外傷の4グループに分け、それらに伴う老人性痴呆に対して気圧を上限とした高気圧酸素治療をイクル10日間として最長イクルまで施行した。改善度の判定には簡易的痴呆診査スケールを用い、更に随伴する神経学的所見の改善度も判定の対象としてとりあげた。

【結果】疾患別改善度としては、頭部外傷によるものが最も高く、施行例11例中7例に改善が認められた。この7例に共通する点は、広汎な脳挫傷を伴わず、薄い硬膜下血腫か外傷性クモ膜下出血が主病巣であることで、注目に値した。脳出血、脳梗塞に伴う19例は、その殆んどが長期臥床の結果、徐々に発症、進行して行ったものであり、有用性は個体差が強く表われた。最後に脳動脈硬化症に起因する28例であるが、既に老人性痴呆として発症から経過の長いものが多く、記憶想起、計算、意欲性等に於て或る程度の改善はみられたが、見当識障害の強いものには改善例はみられなかった。以上より、高気圧酸素治療は、老人性痴呆に対し有意な有用性を認め、特にその発症が急性で長期間の経過を見ない場合に著明であると考えられた。